東九条町で弥生時代中～後期の遺跡を発見

東九条町の弥生時代遺跡・平城京跡（左京八条四坊三坪）　東九条町

今から約1300年前の平城京造営により、それ以前の遺跡は多くが壊されました。このことが、他地域に比べて市内の飛鳥時代以前の遺跡がよくわかっていない原因のひとつです。もちろん、遺構や遺物は見つかりますが、まとまって検出できる機会は珍しく、少ない情報から遺跡の様相を解明する必要があります。今回紹介する東九条町の弥生時代遺跡も、小規模な調査でしたが今後に繋がる重要な成果を得ることができました。

発掘調査の成果

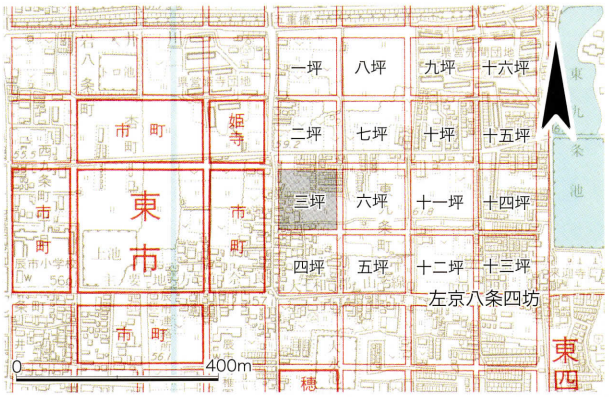
調査は、東西5m、南北12mの発掘区（60㎡）と限られたものでしたが、弥生時代中期初頭の溝1条、中期中頃～後半の土坑10と溝1条、後期後半の溝1条と、遺構の集中する部分を調査することができました。

注目すべきは後期後半の溝で、長さ8m以上、幅1.7m以上、深さ0.4m以上あります。溝は地形の落ち込みに沿って掘削されており、大量の土器を含むことから排水溝や墳墓の周溝とは考えにくく、集落を限る環濠の可能性があります。

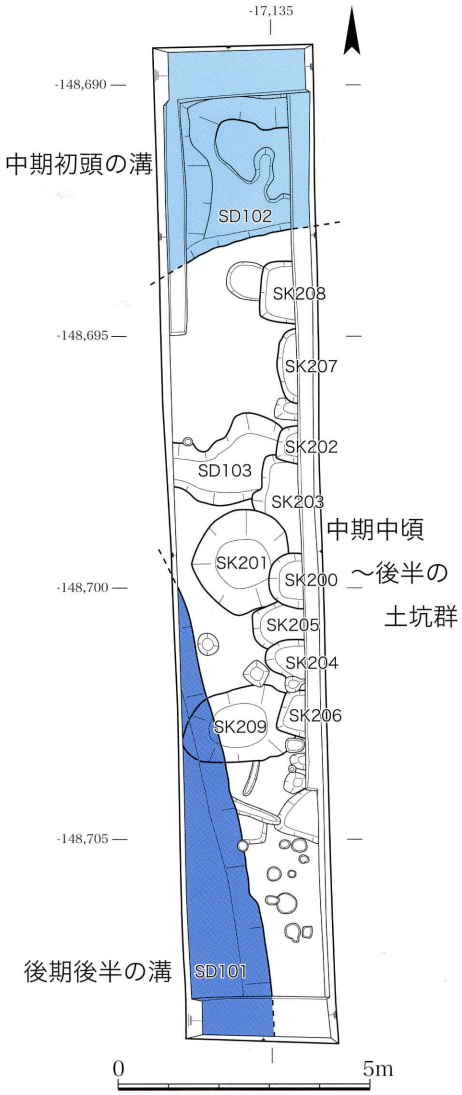
中期の土坑群は、後期後半の溝に接するように掘削されており、遺跡の縁辺部に構築されたものと判断できます。また、土坑群の北側にはこれに先行する中期初頭の溝を検出しました。

これらから、調査地周辺に弥生時代中期初頭～後期後半までの継続的な集落遺跡の広がる可能性が指摘できます。奈良市ではこれまでに環濠集落がみつかっておらず、今後の調査によって未知なる弥生時代遺跡が明らかになる可能性があります。

遺構の検出状況（南東から）



調査地位置図　1/15,000



発掘区の平面図 1/150

出土した弥生時代の遺物

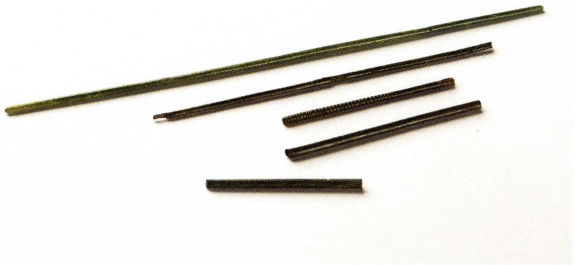
中期初頭の溝、および中期中頃～後半の土坑からは、時期の判断できる土器が少量出土しました。一方、後期後半の溝からは大量の土器が出土しました。器種は、甕・壷・鉢・高杯・器台・手焙形土器があります。この時期の土器は、表面が摩耗したものが多いですが、焼成具合や埋まっていた土質がよかったため製作痕跡をよくとどめており、各器種でミガキ調整などが顕著に観察できます。なかには、甕や鉢の底部に、土器を作る際に敷いた葉の痕跡や籾殻圧痕のある個体もあります。また、近江系の甕や大阪湾岸で見られる高杯などがあり、外来系土器の搬入も確認できます。これらの土器全体をみると、概ね後期後半に通有の形状を呈していますが、高杯は口縁部の短いやや古相のものが一定量あり、大和北部のとくに奈良市域では高杯が古い要素を残す可能性があります。この点も含めて、出土した土器群は大和北部地域の様相を考える上で貴重なものであり、今後の整理・報告によって研究の基準資料となる土器です。

また、籾殻圧痕土器に加え石包丁や磨製石斧といった石器や、銅滓も出土しており、水田や金属生産工房が付近にあった可能性も指摘できます。

出土した弥生時代後期の土器

◆奈良時代の銅箸

今回の調査で平城京に関する遺構はありませんでしたが、素掘溝から奈良時代の銅箸が１点出土しました。調査地西側には東市が推定されており、商品として運ばれたものが混入したと考えられます。銅箸は銅に錫・鉛を加えた合金（佐波理（さはり））製です。平城京出土の銅箸は６例と少なく貴重です。銅箸の多くは寺院とその周辺から出土するため、仏具と考えられています。



※手前が本調査出土品